フィリップ・ホエーランの詩

田　中　泰　賢

フィリップ・ホエーラン（Philip Glenn Whalen, 1923–2002）氏はアメリカの詩人であり、同時に鈴木俊隆老師の流れを受けた曹洞禅の僧侶であった。僧名は禅心龍風（Zenshin Ryufu）である。1966年に京都に来て1967年11月にアメリカに帰っている。そして1969年の3月末に京都に再度来て、1971年の6月にアメリカに帰っている。彼は次のような詩を書いている。

ケネス・レクスロスに敬意を表して

野生はどんなに偉大であるかと私は思いめぐらしていた
当時緑の大地があった、アレクサンドリアの城壁の外に
(あなたのおかげで『ギリシャ詩華集』を読んでいます)
上流のスカジット・バレーのように野生の国
アテネやローマの城壁に至るまで
なんと不思議なことか、これらの古い町が相変わらず活気づき
そして市民は全くアメリカとは違ったスタイルで生活しているのは
(銭湯に入るために私は紫野に歩いていかなければならない)
もしアメリカが20〜30回焼き払われても
住むのに適した町になるだろうか？

1969年6月27日（拙訳）[1)]

ホエーランはケネス・レクスロスに捧げる詩を書いている。ホエーランがレクスロスに大き

な感化を受けたのは1950年代であった。児玉実英氏によると、「レクスロスは1955年サンフランシスコで歴史的な詩の朗読会の企画をした。レクスロスは詩の朗読会の司会を務めている。そこでフィリップ・ホエーランも詩の朗読をしている。朗読をしたのは他にアレン・ギンズバーグ、ゲイリー・スナイダー達がいた。」[2)]「詩の朗読会の後、レクスロスはホエーラン、ギンズバーグ、（ジャック）ケルアック、スナイダーを夕食に招待している」[3)]

児玉はまた次のように述べている。「レクスロスは、アメリカでは大変な大物詩人なのである。彼はモダニズムの世代と戦後のビート世代とを結ぶ偉大なかけ橋の存在だった。ビートの育ての親で、ビートたちに普遍性と国際性を与えていった人である」[4)]ビートの一人であったホエーランもまたレクスロスから多大の影響を受けている。「1967年、レクスロスはヨーロッパと中東各地を旅行した後、初めて日本を訪問して京都に滞在している。京都についてはスナイダー、シッド・コーマン、ホエーラン達から伝え聞いていた。そして鞍馬、比叡山に登り、三十三間堂、六波羅蜜寺、大徳寺を参詣して、仏像や庭園に関心を示している。」[5)]

先ほどの「ケネス・レクスロスに敬意を表して」の詩の下から3行目で、ホエーランは「（銭湯に入るために私は紫野に歩いて行かなければならない）」と書いている。紫野（むらさきの）は京都市にある地域で大徳寺、今宮神社があり、西陣織で知られている。アメリカの詩人が日本の銭湯に行く様子を詩に表しているのは記録としても貴重な資料である。レクスロスは「京都市の紫野にスナイダー夫妻が住んでいたのでそこにしばらく滞在している。紫野は大徳寺の北にあたる。彼等は3畳の小さい部屋で寝泊りしている。」[6)]レクスロスが京都に来た時はホエーランも京都に住んでいた。だからレクスロス、スナイダー夫妻、及びホエーラン達が紫野の銭湯に行ったことがこの詩から伺われる。

中野栄三氏は著書『入浴・銭湯の歴史』で次のように述べている。

> 入浴風俗、ことに温浴思想の普及発達には、仏教上の寄与が大きかった。入浴の起源は、仏像を湯で洗い浄めたことに始まる。そこで寺院の本堂のかたわらには浴殿が設けられ、これを浴堂院と名づけ、その住職を湯維那といった。略。「温室教（ママ）」は釈尊が施浴の功徳について説いたもので、そのことによって成仏するといった。わが国の仏教でもこれを伝え、仏教徒もそのままこれを信じて、聖僧から衆僧に至るまでの供養とし、浄財を勧進して各寺院に浴室が設けられるようになった[7)]。

奈良の東大寺が大浴場を開いて、一般大衆が入浴する傾向を作っていった。また光明皇后の「千人風呂」の悲願から人々の間に入浴する習慣が出来ていった[8)]。公衆浴場（銭湯）は「全国的にはかなり減少しており、1975年には19,161あったものが、1995年にはすでに10,000を

割こみ、9,741、そして現在6,000台である。」[9]銭湯は減ってきているが、依然として市民が会話する場所である。だから銭湯は体も心も健康にする場所である。

レクスロスの翻訳した『ギリシャ詩華集』（*the Greek Anthology*）を読んだことをホエーランは感謝している。レクスロスが翻訳出版した正式な書名は *Poems from the Greek Anthology*（『ギリシャ詩華集からの詩』）であり、111篇の詩が収められている。1962年に出版されている。レクスロスは序文で次のように語っている。「15歳の時、“the Apple Orchard of Sappho” をギリシャ語から翻訳して、ひどく興奮して幾夜も眠れなかった。それからこの『詩華集』とギリシャの抒情詩人たちは私にとって必携になった。あちこちさ迷った時、風呂に入る時、就寝の時、孤独で絶望の時、色々な仕事をしている時、様々な所に行った時、常にこのギリシャ『詩華集』は指導書であり、ギリシャの抒情詩人たちは指導者であり、友であった。ギリシャと中国のおかげで、生命そのものに寄り添う詩人として、また人生哲学を形成できたのである。」[10]

レクスロスの翻訳書『ギリシャ詩華集からの詩』に次のような詩がある。

私には二つの病がございます、
一つは恋患いで、もう一つは貧乏です。
貧乏は我慢できるのですが、恋の病は耐えられません。

詠み人知らず（拙訳）[11]

上の詩の作者は不詳である。このレクスロスの訳詩集には作者不詳（詠み人知らず）の詩が11篇見られる。次の詩はサッフォーの作である。

月が沈む、
そしてプレーイアデスも。
真夜中。時がたつ。
私は一人で眠る。

サッフォー　（拙訳）[12]

高津春繁・斉藤忍随氏はこの詩について「客観的と言ってよい位に冷静に激情そのものを叙している点や、素直な、自然に対する美しい心が、驚くほど単純な言葉によって歌い上げられている点にある」[13]と評している。呉茂一氏によれば、「彼女はクレイスと呼ぶ娘を持ち、これ

を黄金の華のように愛していたことは―その歌の句を借りれば（われに愛(いつく)しき娘あり、金色の花にしも　たぐふべき　姿せる　クレイス　いとほしき）恐らく事実であろう」という[14)]。

サッフォー（サッポー）はよく知られているギリシャの詩人である。呉・中村光夫氏によれば、「紀元前7、6世紀頃に、ギリシアで盛んにおこなわれた抒情詩のいちばんの特徴は、それがまず素人の歌だ、ということです。これまで首座を占めていた叙事詩、英雄歌謡は、どこまでも玄人の歌、長年それを職業として習い覚えた、職業的な弾唱詩人が、うけついだものを歌い、作りかえて歌い、つけたして歌ってきたものでした。ところが、新しく広まってきた抒情詩は、格別にそうした訓練を受けていない素人、たいていは貴族とか地主とかの、やはりある程度の文化、教養を身につけた人々であるのを必要とはしましたが、ともかく素人が自分の感じたまま思ったままを、歌にうたい上げたものでした。ここにその魅力と新鮮さと、流行の根拠とがあったわけなのです。」[15)]さらに「数あるギリシアの抒情詩人中でも、我々の耳にもっとも親しいのは、すみれの冠をいただき、手に螺鈿(らでん)の竪琴をもつサッポーです。サッポーは前7世紀末（前610年頃、620年とも）にレズボス島に生れ、略、その名はギリシア最高の女流詩人として、哲学者のプラトーンに第10番目のミューズとまで讃められています。略。その歌の格調の高さ、情熱の純粋さ、力強い素直さには、技巧以上の美しい魂が燃えています。」[16)]

サッフォーの詩の中にプレ（ー）イアデスという名前が登場している。「プレ（ー）イアデス（Pleïades,）はアトラースとプレーイオネーとの間に生まれた7人の娘をさす。7人の娘（プレーイアデス）の父、アトラースが天を支える罰を受けた時、彼女たちは星にされたともいう。7人の娘の一人、メロペーは人間シーシュポスの妻となったのを恥じ、ために彼女だけは光が鈍く、また7人の娘の一人、エーレクトラー（トロイアの祖）は、トロイア陥落に際し、悲嘆のあまり、彗星になったという。」[17)]プレアデス星団はこのギリシャ神話に由来している。日本では古来、昴(すばる)と呼ばれている。専門家諸氏の論評・説明はこの詩の理解を助けてくれる。

レクスロスはまた『ギリシャ詩華集殻の詩』の中でプラトーンの詩も翻訳している。

いつもの西風で響く
この松という高い冠の
下にお座りなさい
ここの飛び散る流れの傍で
あなたの瞼は
パーンの笛でうっとりするでしょう。

プラトーン（拙訳）[18]

プラトーンと言えばだれでもが哲学者と思う。しかし彼は「詩人でもあった。」[19]「プラトーンは前427年、アテナイの貴族の家庭に生まれました。当時貴族政治はすでにすたれて、民主制が確立し、政治の中心は市民議会と市民法廷に移っていました。当時の若い市民たちは「自由民」として余暇を学芸に捧げるとともに、政治にも強い関心をもっていました。」[20]「パーンは牧人と家畜の神として、上半身は毛深い人間で、有髯、額に両角を備え、下半身は山羊で、足は蹄のある姿と想像されている。彼は身軽で山野を森といわず岩山といわず自由に馳せめぐり、繁みに身をかくしてニンフたちを待ち伏せし、彼女たちや美少年を追い、失敗した時には自慰行為を行った。」[21]「アルカディアのニンフ、シューリンクスがパーンに追われ、まさに捕えられんとした時、ラードーン河岸で葦に身を変じた。風にそよいで音を立てる葦から、パーンはシューリンクス笛を創り出した。」[22]「パーンはシューリンクス笛の音楽を好み、つねに笛を携え、杖をもち、頭には松の冠を戴いていた。」[23]「パンの名は「汎」の意味でありますから、パンの神は、萬有と自然の人格化の象徴だと思われるようになりました。」[24]「思想の宝庫たる神話は、やがて理性と信仰の中間に固有の生命をもって生きるものとなる。ギリシア人のいっさいの考察は、さらにまた、かれらの遠い後継者の一切の考察は、神話から始まっている。悲劇詩人は題材を、抒情詩人はイメージを神話に求めている。略。さらに哲学者も、推論がその力の限界に突き当ったとき、不可知なものを解き放つ方法として神話の助けを求めることがある。こうした神話の一般化、その力の解放こそ、ギリシア文化が人間思想にもたらした基本的な寄与、おそらくはなにものにもまして本質的な寄与の一つであった，と言っても過言ではないだろう。ギリシア神話のおかげで、「神聖犯すべからざるもの」に対する恐怖感は失われ、精神のあらゆる領域に亘る考察の道が拓かれ、詩は叡智となりえたのである。」[25]

先ほど取り上げたレクスロス訳のプラトーンの詩のなかに松という言葉がある。ホエーランの次の詩にも松という言葉がある。

共感

日光を浴びている数本の松の木
モーリス・ラヴェル全集（拙訳）[26]

この「共感」という題名の詩は2行である。俳句や川柳のような短さである。因みにホエーランはまた「戦争」と題する詩を書いている。この詩も2行である[27]。どちらも2行の詩とい

うパターンである。さて「共感」と題する詩の中にラヴェルという音楽家が登場している。江藤正顕氏によれば「父親がスイス系の時計職人兼実業家であり、母親がバスク人であったことは、少なからずラヴェルの音楽に作用しているだろう。と同時に、20世紀の音楽の行方をも作用している」[28]という。江藤は更にこう論じている。

ラヴェルの「ピアノ協奏曲ト長調」の第三楽章は、先の伊福部昭が映画『ゴジラ』（1954年作、内容はビキニ環礁に（ママ）付近に眠っていた古代生物が水爆実験の放射能により巨大化し、日本を襲うという怪獣もの）のテーマ曲に援用していることは言うまでもない。日本の作曲家の伊福部にとっても、ラヴェルの音楽はそれほど遠い存在ではなかった。ゴジラ音楽の間接的な産みの親はラヴェルであった、ということである。世界の音楽潮流に敏感に反応し、同時に民族の血も忘れないという点で、伊福部昭の音楽の現代性とアイヌ民族的要素とは洋の東西で呼応しあっている。フランスとバスク、ヤマトとアイヌという関係である[29]。

ラヴェルという音楽家に日本の作曲家、伊福部が呼応している。伊福部がラヴェルに共感している。ラヴェルの音楽が伊福部によりこだまになって響いている。第一次世界大戦に従軍経験のあるラヴェルの音楽は「ゴジラ」のテーマ曲にこだましているのではないか。第二次世界大戦を経験したホエーランはラヴェルにこだまして「共感」という詩を書いたと思う。科学者であり僧侶である江角弘道師は2010年出版の著書で詩人金子みすゞ氏の詩「こだまでしょうか」を例えに「こだまする」ことについて述べている。

こだまは、こちらが言ったことを受け取って、そのまま返してくれる。だから「こだまする」とは、こちらの存在を丸ごと受け入れて返してくれる行為であり、返ってくる時は、半分の大きさになって戻ってくる。私たち同士、または私たちと自然の間は、互いにこだますることによって成立している。私たちが子どもの時、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに、けがをして「痛い」といったら「痛いね」といってくれました。痛い時に「痛いね」といってくれたおかげで、私の痛さは半分になったのです。さらに、「痛いの、痛いの、飛んでいけ！」とこだましてくれ、こころに添ってくれたおかげで、私の痛さはいつの間にか消えて行ったのです。最近は、若い人たちが理由もなく「殺すのは誰でもよかった」と言って、理不尽に人を殺す事件が増えています。なぜそんな行為をしたかと問われると「父親が自分を受け入れてくれなかった」とか、「会社で、自分を受け入れてもらえなかった」など、だれも自分を理解してくれず、受け入れてもらえない孤独のただ中で犯行に及んでいるようです。昔のように「こだまする」大人が少なくなってきているのでしょう[30]。

江角は「こだま」の重要性をわかりやすく説いている。ノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パス氏は「詩人たちの口を通じて「もうひとつの声」が語り始める―強調しておくが、書くのではなく、「語る」のだ。それは悲劇の詩人の声と道化の声であり、孤独なメランコリーの声と祝祭の声、高笑いと溜息、恋人たちの抱擁の声と髑髏を前にしたハムレットの声、沈黙と喧騒の声、愚かな智恵と賢明な狂気、そして寝室の秘められた囁きと広場の群衆のざわめきである。この声に耳を傾けることは、時代そのものに耳を傾けることだ。それは過ぎ去るが、あとで透明なこだまとなって戻るのである。」[31]と述べている。パスもまた「こだま」について述べている。洋の東西を問わない。2018年6月18日午前7時58分ごろ、大阪府北部で震度6弱の地震が発生した。登校途中の小学校4年生の女子生徒が小学校のブロック塀の倒壊によって亡くなった。中日新聞の社説はブロック塀倒壊について論じている。その一節を引用する。「3年前に防災専門家が警告したのに、市教育委員会と学校は結果として生かせなかった。直ちに撤去したり、改修したりしていれば、と思い返すのもくやしい。」[32]真摯に耳を傾け、こだまするということが如何に大切であるかということを痛切に感じさせる言葉である。

ホエーランの師匠的存在であったレクスロスは「1967年、インドに旅した時、偉大なるメキシコの詩人パスに会っている。パスは当時、メキシコのインド大使をしていた。二人は夕食をしながら二人の共通する中国及び日本についても会話している。レクスロス家族は豪華ホテルには泊らず、インドの貧困、死者を運ぶ手押し車の見える所に泊っている。」[33]レクスロスとパスがお互いに共感して、こだまになって響きあった様子を伺うことができる。パスが後に偉大な詩人になったのもレクスロスとの出会いが大きかったと思う。

ホエーランは「ダルマカヤ」という短い詩を書いている。

ダルマカヤ

本物は常に一つの模倣したもの
禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい
1981年1月20日（拙訳）[34]

上のホエーランの詩「ダルマカヤ」の一行目を「本物は常に一つの模倣したもの」と訳した。原文は “The Real thing is always an imitation” である。この中の “an imitation”（イミテーション）は「模倣したもの」である。王向華氏は模倣について次のように論じている。

創造性がオリジナリティであるという考えは、文化的に、そして歴史的につくられた特異な

概念である。この考えによると、オリジナルとしてつくられていないすべてのものは、否定的な価値を帯びた贋物になってしまう。このクリエーションとイミテーションという対立は、西洋と非西洋の対立に呼応した純粋物と不純物の対立が仮定されることによってはじめて安逸の場所を占めることが可能となる。そしてここから、西洋の自民族中心主義がもたらされたのだ[35)]。

王は論文の中で「イミテーション」と「クリエーション」という対立を西洋と非西洋の対立に呼応させている。この論点に立てば、ホエーランの詩「本物は常に一つの模倣したもの」は私たちに問題提起をしていると読むこともできる。また一方、ホエーランは日本の曹洞宗の禅をアメリカで学び、アメリカで禅寺の僧侶として一生を捧げた詩人であった。アメリカ人としての彼は日本の禅を模倣したのであるが、模倣に止まらずアメリカ禅もまた本物であると確信していたのではないか。こうして読むと今度は逆に日本の自民族中心主義に注意しなければならないと覚える。

板倉聖宣氏は自然科学者の立場から模倣と創造について興味深いことを述べている。彼はこう述べている。「もともと科学における創造というものは、模倣を前提になりたつものである。創造は他人の研究成果の模倣の上にたって行なわれるというだけでなく、創造は他の人々が模倣するにたるような新しい知識の提供をめざすものだからである。だから、科学が発展するためには、新しいものを発見する人々以上に、そのオリジナリティーを認め、それを積極的に評価、模倣し、広めるような人々がたくさんいなければならない。そういう意味で、創造というのは社会的・集団的な営みなのである。」[36)] この発言は傾聴するに値する言葉である。山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』（勉誠出版、2003）を拝読すると模倣の大切さは自然科学に止まらずあらゆる分野においてもあてはまることがわかる。板倉はさらに次のように述べている。

模倣するに値するものは、権威あるものだけではない。日本の教育は画一化しているので、いつも権威を一つしか認めたがらないが、幸い社会にはいろんな権威が争っている。そのどれを模倣するに値するものとして選びとるか、また、その模倣をいかに生かすか、それは自分自身で決めなければならない。それは独創的な仕事といえよう。そればかりではない。まだどこからもまったく権威として認められていない友人・知人のオリジナルな考えを高く評価し、それを模倣することは、さらに創造的なことといえるであろう。他人からは認められていないものの価値を高く認めること、それは独創といっていいのである[37)]。

板倉は「ほんらい、模倣そのものは決して恥ずべきことではないのである。ところが日本では、模倣があまりにもいやしめられ、創造ばかりがもてはやされるものだから、多くの人々は、模倣を創造と気どるようになる。そこで盗作が横行するというわけである」[38]と述べている。彼は模倣を軽視することは問題であると警告している。

上の詩の 2 行目「禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい」の原文は “Consider new plum blossoms behind the zendō” となっている。原文にある “plum blossoms” を「梅の花」と訳したけれど、『ジーニアス英和大辞典（大修館、2001）では 1 番目の意味はセイヨウスモモ、プラムで、［俗用的に］ウメ《正しくは ume, Japanese apricot》となっている。「セイヨウスモモ」と訳すことも可能であるが、ホエーランは道元禅師の法を継ぐ僧侶であるから、『正法眼蔵』の「梅花」の巻を知っていたと思われる。その「梅花」の巻で道元は「自己の魔がやってきて、梅花は瞿曇（ゴータマ）の眼睛でないと思われるならば、思量（おもいはか）りなさい、このほかに何法（どんな法）で梅花よりも（仏の）眼睛であるにちがいないものを挙（とりあ）げてきたならば、（仏の）眼睛と見ようか。その時もこの（雪裏の梅花の）ほかに眼睛を求めるならば、どんな時でも（仏と出逢いながら）対面不相識であるはずであり、相逢未拈出（互いに出逢っていながら拈（と）り出すことがない）であるはずであるからである。今日（という日）は私個人の今日ではなく、大家の（多くの人とともにある）今日である。直ちに梅花の眼睛を開明するはずであり、このほかさらに求めることはやめなさい」[39]と述べている。だからこの詩を「禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい」と訳したのである。

牧野富太郎氏は「梅の英語としては天下晴れての Japanese Apricot を用うべきである。それとも梅の学名は Prunus Mume であるから、略、いっそ簡単に Mume とするかな。梅の花 Mume Blossoms あまり見苦しい字面じゃないね。」[40]と提案している。その理由を牧野は次のように述べている。「元来「プラム」とはなんだね。それは西洋種の李（すもも）のことだよ。日本の李とはよく似たものだが、梅とは違う。学問上では両方とも同じ属だけれどもまったく別のものだ。なおむつかしく言えば「プラム」は Prunus domestica L. という学名のもので、梅は Prunus Mume Sieb. et Zucc. という学名のものだ。略。「プラム」は西洋李のことだから梅を「プラム」というのはちょうど “Dog”（犬）をさして猫だとすまし込んでいるのと同じことだ。」[41]と説明している。ホエーランの禅堂の裏側に咲いている梅の花はやはり “mume blossoms” 或いは “ume blossoms” としたほうが適切であろうか。

牧野は「梅が上古にわが邦（ママ）に渡ったときは、たぶん種類は一種か二種かきわめて少なかったことが想像せらるる。略。それが今日ではわが日本で四百種内外の品種数に達しているところをもってみれば、その多数の変り品すなわち園芸的品種はわが那（ママ）でできたものである。」[42]最初日本は中国から梅を取り入れた時はまだ模倣の段階であったが、月日がたつにつれて日本独自

の品種を改良していったのは創造であり、本物ということになる。吉田雅夫氏によると「梅干しは、日本独特の食品として重要であり、現在でも消費の中心になっている。しかし、近年では梅酒、飲料などの需要もふえている」[43]という。中国から梅を取り入れた時点では模倣的であったが、日本で「梅干し」という独自の物を創り出した。本物である。

上の詩の題名「ダルマカヤ」は日本語では「法身」と訳されている。横井雄峯氏は『日英禅語辞典』で「法身」を “The Law-body” と英訳している。さらに “The absolute nature of the Buddha-mind, which transcends personality and is identical with the Truth. It is considered to be the highest aspect of the threefold body of the Buddha”[44]（仏心の完全な姿であり、自我を越えている。真理と等しい。仏陀の三身（法身・報身・応身）の最高の相であると考えられている）と説明している。姉崎正治氏は法身仏について次のように説明している。

> 因果現象の法は変易の法にして諸行は無常なるも、而もその無常現象は各（ママ）その基く所の永遠の根底ありて三世に亘れる法なり。此故に、此如きの法は又諸仏成道の因にして、一切の変易を超えたる法体真理なり、而して現在の仏陀その人はこの真理の一顕現に外ならず。現身仏は即ち法身仏なり。基督教の言語にていへば、神の言葉なるロゴスは即ち永遠の真理、この真理ロゴスの現はれが即ち世界万象にして、その神の実在真体を天父として吾等に示したる基督は即ち「肉となれるロゴス」なり。此に至れば仏の法は即ち妙法にして、妙法は即ち久遠の仏身、而して現身の仏はこの法身仏陀の具象権化なり。現身仏に対する信仰が進で法身仏の考察となるは、本来自爾の理然るべき者あるなり[45]。

そして姉崎は「仏教は具象的に一人の仏陀に於て、その法の活きたる事実を得、活きたる法、活きたる梵涅槃を信ずるを得、此故に又この現身仏陀の信仰に基きて、その中に、又三世諸仏に貫通し一切衆生に遍満せる法身仏を得たり」[46]と語っている。姉崎はパーリ語仏典と漢訳仏典を併記しながら説明をしている。仏教への真摯な態度を教えられた。

末木文美士氏は中国の禅を代表する語録の一つ『碧巌録（へきがんろく）』の研究でも有名である。末木は論文「『碧巌録』における法身説」で「『碧巌録』の著者である圜悟（えんご）は法身のような実体の存在を認めないわけではないが、それを積極的に主張するというわけではなく、むしろそれをさらに乗り越えて進むことを要求している」[47]と述べている。末木の論文によって禅の立場からの法身説を知ることができる。

末木は別の著書で次のように語っている。

『碧巌録』によって集約される禅の核心は、このようにまさに言葉の問題です。前回も言い

ましたように、禅というのは「不立文字」で、言葉がなくなってしまうのではない。言葉というのは単なる手段ではない。徹頭徹尾、言葉で言い表せということを、どこまでも突きつめていく。そういう思想なのです。ただ、その言葉が日常の言葉ではない、あるいは、日常の言葉を破壊していく、そのような言葉なのです[48)]。

末木は同書で道元の言語論についても述べている。

道元もまたあくまで言語にこだわり、言語で表現することを求めます。しかし、その言語の性格が、『碧巌録』などの公案の言語と全く異なっています。これが非常に面白いです。略。道元は、あくまで仏祖の言葉は「念慮の語句」、意味を持った言葉だというのです。「語句の念慮を透脱（とうとつ）する」というのは、言葉の意味を徹底することによって、それを超えていく。あくまで意味を持った言葉として理解して、しかも、それを完全に理解しきることを極限化するのです。だから、ナンセンスな言葉と考えてはいけない、というのです。もっとも、この「透脱する」というところがポイントで、決して日常的な意味言語のレベルに留まっていてよいというわけではありません。言葉の意味を徹底して考え抜くことによって、その底まで突き抜けることが要求されているのです。それはまたそれで、決して容易なことではありません[49)]。

上の詩を書いたホエーランの禅を理解するのに末木の道元の言語論は貴重な論説である。ホエーランにとって詩はあくまで意味を持った言葉として理解されうる極限化された表現である。決してナンセンスな言語ではない。詩の題名である「ダルマカヤ」（法身）は仏祖の教えを模倣していくことによって本物の法身仏になっていくことを示している。

注

1）Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*. Edited by Michael Rothenberg (Wesleyan University Press, 2007), p. 650.

2）Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture* (Archon Books, 1984), p. 132及び p. 155参照。

3）Linda Hamalian (W. W. Norton & Company, 1991), *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 246.

4）田中泰賢『Buddha　英語　文化　田中泰賢選集 2 』（あるむ、2017）， 8 頁。

5）Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture*, p. 133.

6）Linda Hamalian, *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 324.

7）中野栄三『入浴・銭湯の歴史』（雄山閣、1984）、22–24頁。中野栄三氏の説明のなかに「温室教（経）」という経典の名前が紹介されている。正式には「仏説温室洗浴衆僧経」という。このお経を昭和 9 年に日本

語に訳した清水谷恭順氏は「仏説温室洗浴衆僧経解題」で「本経の大要は、大医王耆域が仏に向い、温室を設けて、仏及び衆僧を澡浴し、垢穢を消除し、衆生をして長夜清浄ならしめんことを願う。仏、これを嘉し、広くその福報を説き、併せてそれが澡浴の方法を教えたもうたものである」と述べている。(『国訳一切経　経集部14』大東出版社、1934（昭和９))：409–413頁。(原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した)。

8）同上、24–27頁参照。樽井由紀氏は論文「仏教寺院の温泉、共同浴への影響について」(『佛教大学　歴史学部論集』第７号、2017年：97–110）において、今まで見落とされていた仏教寺院による施浴（寺湯）の果たした役割を詳しく論じている。樽井氏は「近年まで存在した寺湯や、農村部の各種の講によって営まれた共同浴は、中世・近世を通じて密接に関連しており、温泉もその例外ではないことが明らかになった。これが有力寺社の多い京都や奈良に特徴的なことであるのか、それとももっと広がりを持つのか、さらに今後の調査と研究が必要である」(109頁）と結んでいる。氏の更なる研究が期待される。

9）木藤紳一朗「公衆浴場をめぐる法的諸問題」『京都学園大学法学部二十周年記念論文集　転換期の法と文化』(法律文化社、2008：154–180)、170頁。

10）Kenneth Rexroth, “Foreword.” *Poems from the Greek Anthology*, Translated, with a Foreword, by Kenneth Rexroth with drawings by Geraldine Sakall (The University of Michigan Press, 1975).

11）同上、p. 8.

12）同上、p. 100.

13）高津春繁・斉藤忍随『ギリシア・ローマ古典文学案内』(岩波書店、1966)、47頁。

14）呉茂一（くれしげいち）訳『増補ギリシア抒情詩選』(岩波書店、1959)、28頁、42頁。(原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した)。ちなみに川野美智子氏はロレンス・ダレル作の詩劇『サッフォー』(大阪教育図書、2013）を訳している。川野は「訳者あとがき」で次のように述べている。「ピッタコスの元に育てられ、長く母と別れていた娘クレイス（Kleis）がついにサッフォーの許に戻ってきたとき、サッフォーは娘に言う。「沈黙に耳を傾けなさい、娘よ、あなたには聞こえる？」略。沈黙に含まれるすべて―それはサッフォーの耐えた苦しみも悲しみも、クレイスの感じた寂しさも孤独も、男たちの戦いも犠牲も、罪も赦しも、殺戮も恩讐も、すべてを含むのである。二人だけの沈黙の中に、クレイスの泣き声だけが忍び音を洩らすとき、サッフォーは静かに語る。泣きなさい、かわいいクレイス、あなたは私たち二人のために泣くのよ。もし充分に涙があれば、全世界のために泣きなさい。そして世界に泣くべき涙がもうないと思うずっと後にはあなた自身のために泣きなさい。」(274–275頁）

15）呉茂一・中村光夫『ギリシア・ラテンの文学』(新潮社、1962)、62–63頁。

16）同上、67頁。

17）高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、1967)、220–221頁。

18）Kenneth Rexroth, *Poems from the Greek Anthology*, p. 96.　日本語に訳したテクスト（レクスロスの英訳）は次の通りである。 “Sit down under the high crown / Of this pine, always sounding / In the steady West Wind, and / Here by the splashing current / Pan’s pipe will entrance your / Spellbound eyelids. Plato” それに対して W. R. Paton の英訳は次のようになっている。 “Sit down by this high-foliaged vocal pine that / quivers in the constant western breeze, and beside / my plashing stream Pan’s pipe shall bring slumber to / thy charmed eyelids.” (*The Greek Anthology* with an English translation by W. R. Paton In Five Volumes V (Harvard University Press, 1979), p. 165.)

19）呉茂一・中村光夫『ギリシア・ラテンの文学』、95頁。

20）同上、94頁。

21）高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、198頁。
22）同上、134頁。
23）同上、198頁。
24）ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話上』野上弥生子訳（岩波書店、1966）、204頁。
25）ピエール・グリマル『ギリシア神話』高津春繁訳（白水社、1956）、12–13頁。
26）Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 494.
27）田中泰賢「既成価値を問うアメリカの詩人たち―ホエーラン、スナイダー、ギンズバーグ」『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号、（2018：15–33）、26–27参照。
28）江籐正顕「モーリス・ラヴェルと近代社会：二つのピアノ協奏曲をめぐって」『*Comparatio*』九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会、15巻、(2011：89–100)、96頁。
29）同上、98–99頁。
30）江角弘道『いのちの発見～宗教と科学の間で～』（財団法人　空外記念館、2010）、51–52頁。
31）オクタビオ・パス「詩、神話、革命」野谷文昭訳、『中央公論』文芸特集、夏季号、（1991：44–51）、51頁。
32）「社説　ブロック塀倒壊　無責任が犠牲を生んだ」『中日新聞』2018年（平成30年）6月23日（土曜日）
33）Linda Hamalian, *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 324.
34）Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 774.
35）王向華「模倣の創造―ヤオハンの事例を中心に―」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』（勉誠出版、2003：155–180）、156頁。
36）板倉聖宣（いたくらきよのぶ）『［増補版］模倣と創造―科学・教育における研究の作法―』（仮説社、1992）、12頁。
37）同上、72–73頁。
38）同上、12頁。
39）水野弥穂子訳註『正法眼蔵 5 原文対照現代語訳・道元禅師全集⑤』（春秋社、2009）、235頁。瞿曇（くどん・ゴータマ）はお釈迦様が出家する前の本姓。お釈迦様をさす。
40）牧野富太郎『牧野富太郎選集第二巻』（東京美術、1980）、121–122頁。
41）同上、120–121頁。
42）同上、114頁。
43）『朝日百科　植物の世界　5　種子植物　双子葉類』全15巻（朝日新聞社、1997）、5–88頁。
44）横井雄峯（Yūhō Yokoi）、*The Zen Buddhist Dictionary*（山喜房佛書林、1991）、227頁。昭和7年に「仏説法身経」を日本語に訳した田島徳音氏は「仏説法身経解題」で「法身仏は報身と法身とを合している」（260頁）と述べている。（『国訳一切経　経集部15』大東出版社、1932（昭和7）：259–265頁）。また「百千頌大集経地蔵菩薩請問法身讃」（日本語訳者：矢吹慶輝氏、昭和11年）に「応に菩薩を礼すべからずとは　これを甚だ悪説と為す。　菩薩に親しまずんば　その法身を生ぜず」（264–265頁）と説いている。また同書に「世尊の妙法鈴は　普遍く聞くことを得しめ　この振声に由るが故に　煩悩の塵を除落す」（270頁）と説いている。（『国訳一切経　大集部5』大東出版社、1936（昭和11）：259–271頁）。（原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した）。
45）姉崎正治『現身仏と法身仏』（有朋館、1904）、251頁。
46）同上、257頁。
47）末木文美士「『碧巌録』における法身説」『東隆眞博士古稀記念論集　禅の真理と実践』（春秋社、2005：

459–473)、471頁。因みに『碧巌録』について末木は次のように説明している。「中国の宋の時代に、雪竇重顕（980–1052）という雲門宗の禅僧が、当時行なわれていた公案の中から重要なものを100選びだし―これを本則と呼びますが―、それに対して頌と言って、それぞれの公案に対する自分の受け止め方を詩の形にしたものを付けました。それを『雪竇頌古』とか『頌古百則』とか呼びます。それに圜悟克勤（1063–1135）という臨済宗の人が垂示と著語と評唱を付けました。垂示というのは、イントロダクションで、各則のはじめに、その則を読む心構えを述べたものです。著語というのは、本則と頌のほとんど一文ごとにコメントを付けたもので、なかなか読みにくい厄介なものです。評唱は、本則と頌に対する注釈や解説的なことがらを述べたもので、本書の中ではもっとも散文的な、わかりやすい箇所です。このように、本書は最終的には圜悟克勤という人の著作ということになるわけですが、きわめて重層的な成立過程と複雑な構造を持っており、これが本書の読み方を難しくしている一つの原因です。」末木文美士『「碧巌録」を読む』(岩波書店、1998)、5頁。

48）末木文美士『「碧巌録」を読む』、103頁。

49）同上、108–113頁。抜粋引用。

※拙稿の中で紹介した諸氏のお名前は、初回のみ姓名に敬称をつけ、次に使用する時は姓のみの略称としました。ママは原文のままという意味です。